札幌彫刻美術館友の会会報　2023 年 10 月

いずみ

No.85

街なかの美を守ろう

（題字　國松　明日香）

自作自選 55

《地の声》

丸山　恭子

（2 ページに「作者の言葉」）

自作自選 55　作者の言葉

3年前、コロナ禍で社会に不安が満ちていた時、やり切れなさの中で、ふと観音様のような作品を作りたいと思いました。

人ならぬものとして、この作品は背中側が抜けていて身体の中の空洞が見えるように作っています。羽衣のように風に乗るイメージで…。どんな状況下でも人々は泣いたり笑ったりしながら生きています。感情が動き出す一瞬を作品にしたいと思って制作しています。　　(1963年、北海道生まれ。道展会員)

タイトル	：地の声
制作年	：2021 年
素材	：水性ＦＲＰ
サイズ	：H96×W35×D32cm
設置場所	：作者蔵

連載　宮の森の四季　55　本郷新記念札幌彫刻美術館

「感覚と言葉」

課　長　　嶋田　雅人

少し恥ずかしい理由で肩を骨折しました。予後は良いのか悪いのかよくわかりませんが、鈍い痛みと違和感はずっと続くのかもしれないと感じています。

私はこれまで骨折をしたことがありませんでした。「嫌な音がした」「試合中は痛みを感じなかった」など、言葉としての骨折のイメージは頭にありましたが、この経験でこれらの言葉と実体験がつながりました。

AI 技術が急速に発達しています。テキスト生成 AI は、こちらからの呼びかけに対してまるで知っているかのように返してきます。しかし身体を持たない AI は、人と同じようにモノゴトを感じているわけではありません。返してくる言葉は AI の体験に基づくものでは無く、膨大なデータベースの中からもっともらしい記号を組み合わせて、「記号を別の記号で表現」しているだけらしいのです。これを「記号接地問題」といいます。言葉(記号)が実際の感覚と繋がっていない(接地していない)状態です。一方で AI は整理された伝わりやすい文章を書くことについては私よりも格段に上手です。

屋外にある、横たわる男の肩をがっしりとつかんでみました。気温 30 度を超える中、彼の肩は熱く、その凹凸は肉の存在を感じさせます。これを彫った人と自分がいくつかの媒体を通して接しているという確かな感覚があります。

実際の経験と感覚を大切にすること、それをしっかり言葉とつなぐこと、そのためには AI の助けも借りられるかもしれない。そのようなことを考えています。

「アートサロン細川」オープン 10 周年

大切にしたい人とのつながり

会 員 細川 房子

10年前、自宅とは別に、親から相続した土地に一軒家を建てました。東京から帰って来そうな息子から家賃をせしめるつもりがなかなか帰って来ず、仕方なくギャラリーを始めました。

初めは鉄の彫刻家である弟の作品を展示していましたが、次第に多くの作家の方々の作品を並べるようになりました。たくさんの作品に触れ、制作の苦労話を聞き、素材の違いによって作品の見所が変わるなど、会場を訪れる人たちと随分楽しませてもらいました。

いつの間にか 10 年が経ちました。展示ばかりではなく、昼間はいろいろな講座を開きました。中でも、美術鑑賞会は人気です。友の会の会員で、アートコーディネーターの高橋淑子さんがプロジェクターに二人の作家の作品を映し出しながら共通点、違う点などを比較し、大変興味深いお話をして下さいます。

すでに終了しましたが、「源氏物語」をはじめ、現在は「万葉集」、「英語で話そう」、「着物でお茶会」、「アイヌ刺繍」、「オープンマイク」、「うたごえ」、「アヘアホ体操&笑いヨガ」ほか、スマホ・PC の勉強会などの講座があります。

月 1 回のコンサートも道内アーティストばかりでなく、道外からの出演もたまにはあります。狭い箱の中ではアーティストとの距離が近いので臨場感があり、思いがけない楽しみがあるようです。

最近、奥の和室にドールハウスのコーナーを増設、20 点余りのドールハウスを常設しました。かつて 自宅のあるマンションで 8～9 年続いた文化祭がありました。私は油絵、母が習字、写真、手作りアクセサリー、ステンドグラスなどを出品しました。その文化祭にドールハウスが数点展示されていて、作者は坂本京子さんという方でした。お元気だったのに彼女は昨年 12 月、急性心不全で他界。残されたご主人は病弱で、一人では生活が難しく、娘さん家族と同居することになり転居。そこで、作りためた奥様のドールハウスを処分してほしいと依頼されました。6 月の1カ月間、ご供養のつもりでギャラリーに展示しました。北海道新聞の「さっぽろ 10 区」に掲載されたこともあり、百数十人の熱心なマニアの方が訪れ、その熱心さに驚かされました。

まったく知識がなかった私ですが、ドールハウスはドイツの貴族が子供のために職人に作らせたものらしく、やがてヨーロッパ、アメリカと広がり、今や世界中に広がったこと、基本的には実物の 12 分の 1、24 分の 1 の大きさで作ること。主に樹脂粘土や木片などのほか、日頃集めためた物で家具や設備関係を作るなどを知りました。現在、神奈川県箱根にドールハウスミュージアムがありますが、それ以北には常設しているところはないようです。

また、夜は民泊で多くの人とつながり、それぞれに楽しい体験をさせて頂いています。外国人客もあり、初めは言葉の心配がありましたが、今や便利な翻訳ソフトが私の味方です。難しい会話はソフトが解決してくれ、特に困ったことなどはありません。

エピソードは山のようにあり 1 冊の本が書けるくらいです。ゲストノートに張った写真を見れば、次から次へと思い出がよみがえりノートは 5 冊目。こんなに多くの方々に来て頂けるとは思ってもみませんでした。札幌に居ながらの国際親善（？）。札幌ドームが近いので日ハムファンが道北の佐呂間や遠く大阪などからも集まります。

ここはギャラリーというより、サロンとして昼も夜も共に感動し、話し合える場所。これからも人とのつながりを大切に、夫と二人三脚で体の続く限り継続できたらこんなに幸せなことはありません。

寄稿

彫刻の保全補修を「地産地消」で
道内作家の資格取得で体制整う

会長　髙橋　大作

彫刻作品はもっぱら彫刻家が制作し、屋外ないしは屋内に設置して、人々の観覧に供するものです。しかし、私共友の会の会員で野外の彫刻像を清掃するたびに思うことがあります。当たり前のことですが、像自体は言語を発することはありません。だからこそ清掃に携わる人間は像の「体調」をよく観察し、声なき声を拝聴しなければならないのです。

新しく彫刻家が制作し、地方自治体なりが公園などの場所を提供して設置し、華々しくオープンセレモニーを終えた後は、寂しく雨に打たれ、雪に覆われ、嵐の中でも一人たたずんでいるのです。そうこうするうちに年月がたち、暑さ寒さで金属の伸縮に耐えきれず「ひび割れ」や「穴」があいたり、場合によっては像本体を台座に強固にとめてあるはずのアンカーボルトがボロボロに腐食し、横から押すとグラグラと揺れるようになっているものもあります。

そういう事態に対して当会の橋本信夫名誉会長が「地産地消」という掛け声をあげました。

本来の使い方は、地元で収穫された農作物などをまずは地元の人自身がおいしくいただきましょう、ということですが、この考えは地球温暖化ないしは気候危機の現状を見れば現在当然のこととして考えられることです。それを彫刻像の維持管理に当てはめて考えたわけです。北海道内に現在設置されている像の維持管理、とくに「補修」については道内でそれができる人がいるならば、その人に「補修」をお願いするのがいろいろな点で妥当と考えています。

コンクリート像についてはもうその体制というかシステムが完成しています。コンクリート一般について言えば、それを取り巻く自然、そして社会環境は日本全国の中で北海道が最も厳しい地域です。よってコンクリート補修業者の技術レベルはおのずと日本国内で最も高い施工技術を要求されます。それを土木や建築分野だけでなく芸術分野の彫刻像の補修に応用してもらうのです。

それならば、ブロンズ像などの作品の補修についてはというと、それを担える方が少なく、当会としても長い間見つけることができませんでした。しかし、灯台下暗しでした。

美唄の彫刻家・安田侃氏の作品の維持補修を担当している彫刻家の伊藤隆弘氏が当会の要望を聞き入れて下さり、特に補修対象案件の多い札幌市の一般競争入札参加資格まで取得していただき体制は整いました。

戦後、たくさんの彫刻像が制作され、設置され、今や一斉に更新、補修の時代に入りました。いまこそ「地産地消」の精神で芸術作品を守るために行動を起こしていきたいと思う次第です。

寄稿

屋外彫刻調査保存研究会事務局のこと

前武蔵野美大教授　黒川　弘毅

今年3月末、私は武蔵野美術大学（以下、武蔵美）を退職し、屋外彫刻調査保存研究会（以下、屋彫研）の事務局は東京造形大学 藤井匡研究室に移りました。事務局を引き受けることは、『通信』の発行による会員への連絡、運営委員会の調整、定期的に開催される研究会や総会の準備、開催などの実務を担うことです。会則には「事務局長」という役職、「事務局」の規定はありません。

2003年、私の武蔵美奉職により、私の個人研究室が屋彫研の文書、資料類、『会報』印刷物の保管場所になり、私は事務局としての仕事を引き受けました。04年発行の『通信』No.15から屋彫研の連絡先住所は「武蔵野美術大学彫刻学科研究室　黒川方」と明記されました。学科研究室は屋彫研の活動に協力的で、連絡先にその電話番号を記しました。05年以降、屋彫研のイベントは武蔵美で開催することが定例となり、問い合わせには学科研究室のスタッフが丁寧な対応や取り次ぎをしてくれました。

因みにそれ以前は2000年から、今年、新会長に就任した髙橋幸次が在職していた日大芸術学部で開催されました。今後は東京造形大学での開催です。大学に事務局を置くことは、教室を会場に使用でき、学生たち若い非会員に会の活動をプレゼンテーションし、入会を促す上で有利です。

屋彫研の会長は初代が故柳生不二雄氏、前が藤島俊會氏、現が髙橋氏と美術史家・美術評論家が就任することが慣例となっています。それは1997年発足以来の本研究会の活動方針、「学問的研究に留まらず社会への働きかけを会の実践的運動として模索する」にあります。屋彫研は屋外彫刻の管理者や自治体に対して、作品の保存に関する“提言”を幾度か行ってきました。提言書は会長名で提出されるため、会長にはその知見に関して高い学術的専門性を有することが条件と思われています。

私の“事務局長時代”の思い出は、何と言っても札幌彫刻美術館友の会との交流です。

木下成太郎像（木下は武蔵美の前身－帝国美術学校設立時の校主＝理事長）をテーマとした「シンポジウム2010　北の彫刻」が、私と友の会の方々との初対面です。故亀谷隆氏（友の会会員で武蔵美校友会北海道支部長、2020年5月に逝去）が企画の中心でした。

屋彫研との共催により開催されたシンポジウム2015「野外彫刻を創る・守る」には、藤島会長を含む6名の屋彫研会員が登壇しましたが、そこには市民を主体とする友の会の活動への強い関心がありました。このとき大分大学の田中修二氏（屋彫研『会報』編集責任者）、篠崎未来氏（屋彫研会計）により木下像の美術史的調査が行われました。

翌年、武蔵美で開催された全学研究集会「札幌中島公園の《木下成太郎先生像》について」では亀谷氏と友の会会長の橋本信夫氏が登壇。橋本氏は「市民による保存の経緯」を講演し、また、田中氏等による像の「美術史的価値と重要性」の発表がありました。

木下像の修復は友の会会員の唐牛幸史氏、大利誠司氏により2017年から2年を掛けて行われました。そして19年の公開セミナー「いま、野外彫刻の保全を考える」等々…。

私は08年頃に亀谷氏と出会って友の会の存在を知り、その後その会員になりました。

黒川弘毅氏は今年3月、武蔵野美大教授を退職。（有）ブロンズスタジオに在籍。

2023年8月18日 バスツアー
好天に恵まれ、東川と旭川へ

コロナ禍で止むなく中止に追い込まれた昨年のツアーのリベンジとあって 33 人の参加者の意気込みも盛んで、日帰りながら強行スケジュールを完遂した。縄野裕子さん、押野記代子さんにツアーの印象記を寄せてもらった。

TV 塔前発―道央道砂川 SA－アートホテル旭川―東川町・せんとぴゅあ―道の駅・道草館―中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館―TV 塔前着

知的好奇心をかき立てられて
縄野　裕子さん

友の会の旅はいつも私の知的好奇心をふんわりと包んでくれます。砂川SAで「夏の陽」の可愛らしい彫刻について橋本名誉会長は作者名がないのは作者へのリスペクトがないからだと熱く語りました。なるほど。

東川町「せんとぴゅあ」へ。人気の町の魅力の1つ「君の椅子」の写真にも魅了されました。また、主に北欧家具デザイナーによる織田コレクションの貴重な椅子たちの展示も見れました。木造のギャラリーはやはり林業の町を感じさせました。

〝中原悌二郎美術館〟は旧第7師団の社交場だったとのこと。1902年建造の国の重要文化財でもある歴史的建造物。同時代の北大の古河講堂と少し雰囲気が似ていると感じました。

中原の代表作「若きカフカス人」や老人を描いた彫刻などを鑑賞。英語のタイトルが「Young Caucasian」で、コーカサス地方の民族を指すようです。

帰路は全員参加のプレゼント付きクイズ。最後の質問は細川房子さんの素敵な歌がヒントでした。さらに、大内和副会長所蔵の貴重な三浦綾子・光世ご夫妻の肉声 CD も聞かせて頂き、本当に仲の良いご夫婦だったと感動。

楽しい企画いっぱいの旅をありがとうございました。

じっくり鑑賞した織田コレクション
押野　記代子さん

昨年、コロナで中止となった東川・旭川への 1 泊旅行をギュッと凝縮した日帰りバスツアーが台風一過の 8 月 18 日、無事終了しました。

砂川 SA のきれいなトイレに寄り、バスの中で橋本名誉会長から作者名の記されていない彫刻についてのお話。アートホテル旭川 15 階の眺望のいいレストランで、ビュッフェを堪能しました。

行く先の東川町について髙橋会長から、古い小学校を改修した「せんとぴゅあⅠ」は 1 階がギャラリー、2 階が日本語学校とのお話あり。「せんとぴゅあⅡ」の図書館を抜け、織田コレクション、「君の椅子」の展示を見学。写真やアート・工芸・家具など、ぜひまたゆっくり見に行きたいです。

建築家、隈研吾氏のサテライトオフィスをバスから眺め、道の駅「道草館」で買い物。

最後の中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館は、国の重要文化財になっている木造洋風建築物。中原の現存する貴重な 12 作品と、中原悌二郎賞受賞作品などを鑑賞しました。

帰りのバスでは、賞品が当たるクイズ。三浦綾子記念文学館に寄れなかった代わりに、三浦夫妻が結婚 30 年の記念に吹き込んだという綾子さんのナレーションと光世さんの歌が入った珍しい CD が流され、心洗われる旅の締めくくりとなりました。

全開!! 2023年度彫刻清掃活動

脱コロナ　3年ぶりフル回転

6月11日　道庁前庭《北の母子像》

本郷新が1978年、北海道文化賞受賞の感謝を込めて道に寄付した作品。除幕式は本郷の死後3ヵ月後の1980年5月12日。洗剤で汚れを取り、初めて電池式の高圧洗浄機を使用。蜜蝋ワックスを塗布した。

6月24日　彫刻美術館サンクスデー

「洗って味わう彫刻のカタチ」をテーマに彫刻美術館が開いたサンクスデーに参加。来場者と共に記念館前のトルソー作品2体を清掃。水洗いだけの予定だったが、快晴だったので急きょ、ワックスも塗布。

6月25日　大通公園《若い女の像》

札幌大通公園ロータリークラブとの共催で西7丁目から12丁目まで、《若い女の像》《漁民之像》《有島武郎文学碑》の3体。ロータリークラブとの共催は3年目で、5人が参加し、通りかかった子供も飛び入り。

7月9日　円山公園《岩村通俊像》

普段は木立の中であまり目立たない《岩村通俊像》。1967年に建てられたがほとんど手入れがされず、洗剤を使った水洗いで輝きを取り戻した。《よいこつよいこ》は5年前の修復工事後、初めての清掃。

7月28日　中島公園《木下成太郎像》

国際交流の促進を目指す札幌国際プラザから3人のメンバーを迎えての彫刻清掃。同プラザが推進する札幌市のMICE事業の一環として外国からの観光客に彫刻清掃を体験してもらうにはどのようにするかを探るための実体験が目的。水洗いからワックスがけまで体験し、磨き上げられた彫刻にすっきりした表情だった。

8月5日　中島公園《鶴の舞》ほか

中島公園のキッズガーデンの子供たち7人と山内壮夫の彫刻4体を水洗い。中には3歳の子も一緒に。ブラシでゴシゴシして満足そう。

髙橋大作会長が
屋外彫刻調査保存研究会に登録

屋外彫刻作品の保存の在り方を考える屋外彫刻調査保存研究会（髙橋幸次会長）に橋本信夫名誉会長が入会していたが、会長交代に伴い、髙橋大作会長が入会することになり、このほど手続きを終えた。また、同会はこれまで事務局長を黒川弘毅前武蔵野美大教授が務めていたが、藤井匡・東京造形大教授に代わった。

事務局日誌▼2023年6月8日＝定例役員会(エルプラザ)老朽彫刻再調査計画、道デジタルミュージアム登録など▼11日＝彫刻清掃(道庁前庭)《北の母子像》▼24日＝彫刻清掃(彫刻美術館)サンクスデー支援▼25日＝彫刻清掃(大通公園)《若い女の像》ほか▼27日＝会報84号発送(エルプラザ)「ぶらり札幌」送付作業▼7月9日＝彫刻清掃(円山公園)《よいこつよいこ》ほか▼28日＝彫刻清掃(中島公園)《木下成太郎像》国際プラザと共同で▼8月10日＝定例役員会(エルプラザ)会報85号編集企画ほか▼18日＝友の会バスツアー(東川、旭川)

編集後記▼気付かれた方もいると思いますが、84号(7月発行)から会報の手触りが少しばかり薄くなりました。紙の厚さをこれまでより薄くしたのです。印刷費の値上げに伴い、山藤山陽印刷さんからのアドバイスで印刷費増を回避することができました。物価高騰の折、ありがたい提案でした▼今夏の猛暑は如何お過ごしでしたか。酷暑の中、度々の彫刻清掃に汗を流された皆さんに拍手。

(大内)

札幌彫刻美術館友の会

会報「いずみ」　№85

2023年10月1日発行

発行人　高橋　大作

編集者　大内　和

(札幌市清田区清田5－4－6－30

011-884-6025)

印　刷　山藤三陽印刷

会報「いずみ」85号　目次

自作自選55　《地の声》　丸山　恭子　・・・　表紙

宮の森の四季55　「感覚と言葉」　嶋田　雅人　・・　2

風見鶏「アートサロン細川オープン10周年」　細川　房子　・・・・　3

寄稿「地産地消　体制整う」　髙橋　大作　・・・・　4

寄稿「〝屋調研〟事務局のこと」　黒川　弘毅　・・・・　5

友の会ニュース　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6-7

バスツアー東川・旭川（縄野裕子／押野記代子）／全開2023彫刻清掃

髙橋会長屋彫研登録

事務局日誌／編集後記／目次／美術館行事予定ほか・・・・・　8

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本　館

■彫ってない彫刻　開催中～12月17日日

字義に従えば「彫刻」とは、石や木など硬い素材を彫り刻むものであるが、広義には盛ったり、貼ったり、付けたりして造形される立体表現も含まれる。造形物によって支配された空間そのものを指して彫刻と言うこともあり、昨今では立体視されるなら、映像作品さえも含まれ得る。本展では意外性の高い技法や素材による立体作品を通して、彫刻芸術についての考察を深め、その広がりゆく可能性と今後の展開をも探る。

記念館

■コレクション展「石と木」　開催中～2024年5月26日日

札幌・大通公園の《泉》の像や戦没学生記念碑《わだつみのこえ》など塑像作品に代表作が多い本郷新だが、石彫や木彫など不可逆性の要素が色濃いカーヴィング作品も手掛けている。本展では、ひときわ進取性に富んだ表現を見せる館所蔵のそれらの全部を展示、公開する。

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目　☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください

https://sapporo-chokoku.jp